Furthe notes on the migration of *Muscicapa mugimaki* and *Erithacus sibilans* (Ishizawa, Jicho)

New specimens of two Mugimaki Flycatchers struck at Minokojima Light-house, Oita, 4 May 1962 and one *E. sibilans* from Eboshijima Light-house, Saga (both Kiushiu) as well as Nishida's report about passage of the latter species along north Kiushiu coast, are additional evidences for the author's previous view on the migration route of these birds (Tori Nos. 76, 77).

佐渡島に於けるウグイスの渡りについて

石 沢 慈 鳥

佐渡島に蕃殖する鳥類のうち、夏島と漂島は一体どこから渡るものであろうか。日本地図を開いてみると能登半島又は新潟県の柏崎市から新潟市あたりから渡るように見える。しかも前者より後者の方が距離が近い。一体どちらを通るものが多いのであろうか。

本年、1963年4月15日夜石川県へぐら島燈台で8羽のウグイスが落鳥し、私のところにご送付頂いた。8羽は何れも♂で、体重は5匁内外であった。体脂肪は小ノ大乃至中ノ小という所であり多くはなかった。

ウグイス♂8羽が輪島港より北方へ直線距離 27.5 マイルもあるへぐら島燈台に衝突したのは興味深いことで、この群は能登半島より佐渡島に渡る一群中の一部のものであることをさとしたのである。

また、この一群は能登半島より佐渡島に渡る途中天候の急変にあい盲目飛行をしている間に幸にもへぐら島燈台の燈光を発見してへぐら島に達し一命を助かった群中の一羽のギセイ者であることを知ったのである。それから、ウグイスは8羽群先ず蕃殖地に渡り、各自縄張りを定め、そのあとに♀群が渡来する習性のあることをさとしたのである。ウグイスは蕃殖地に於て縄張り争いの特に強い鳥類であるからそれは当然なことであろう。それから佐渡島の野鳥研究家佐藤春雄氏と石川県の野鳥研究家長柄他喜男氏に、冬季に於けるウグイスの越冬状況について書面を以てお伺いしたところ、両地とも1部残留するが、1部は暖地に去るというお回答を頂いた。恐らく佐渡島に蕃殖するウグイスの1半は秋能登半島に渡り、冬季は関西地方の積雪のない暖地に越冬するものと考えられる。

このような次第で上記ウグイス♂8羽の落鳥は、佐渡島に蕃殖する漂鳥性のウグイスで、越冬地の関西地方より東北進して石川県に至り、さらに佐渡島に渡る途中のものであったと考える。読者諸賢のご批判を仰ぐものである。

終りに毎度貴重なる落鳥をご送付頂いている輪島航路標識事務所長長谷川剛氏をはじめご所員の方々、また石川県と佐渡島の野鳥について平生有益なるご報告をよせて頂いている長柄他喜男氏と佐藤春雄氏に深く感謝する次第である。 (1963年5月記)

On the migratory movement of *Cettia diphone* of Sado I.
(Ishizawa, Jicho)

Eight specimens of the Bush Warbler struck at Hegurajima Light-house north of Noto Peninsula on 15 April, 1963 were sent to the author. These were all males which possibly preceeded the female group. This species is a partial migrant both in Sado I. and Noto Peninsula (communications from Mr. Sato and Mr. Nagara) and thus part of the population of these northern districts may winter in warmer Kansai area.

取得野生死鳥の解剖標本用保存について 石 沢 慈 鳥

解剖用に使用する野鳥を地方の人から送ってもらったり、自分が旅行先で捕獲したものを、そのままにしておくと思ち腐敗してしまうが、1 カ月内外も解剖に適した状態で簡単に保存できたら、たいへん便利である。しかしそんなよい方法があるだろうか。ところがあるのである。つぎにその方法をご紹介しますことにしたい。

必需品はホルマリン、10 cc 注射器、大小のビニール袋、輪ゴムである。ホルマリンは 10 倍の水でうすめておく。つまり、このホルマリン 10 倍液を死鳥に注射するのである。その注射量はスズメ・ホホジロ大の小鳥では 5—7 cc、ツグミ大の小鳥では 10—15 cc 位で、10月—4 月の温度の低いときは少なく、5 月—9 月の温度の高いときは多く注射する。ハト大やキジ大の鳥は一層多く注射する必要がある。腹部は最もくさりやすいので、腹部には最も多く注入し、1 羽分の半分以上を注入する。ついで胸に数カ所、嘴を開いて注射針をさし込み食道に流し込む。両眼と頭内にも注射針をさし込み少量ずつ注入する。これは小鳥類に注射する方法であるが、大形の鳥になると注射針をさし込む個所も一層多くなることになる。

ホルマリン水はあまり沢山注入すると体の表面にしみ出て、羽毛はグチャグチャにぬれてしまう。なるべくぬれない程度がよい。ぬれたものは紙や布でふきとることである。ホルマリンを注入したものをそのままにしておく数日で鳥体の水分は乾燥して鳥は固くなってしまふ。これを防ぐためにはビニール袋に入れ入口を輪ゴムで巻いて乾燥を防ぐことで、こうしておけば 1 カ月内外は大丈夫である。その間にも時々点検して乾燥度をしらべる必要があり、もし乾燥気味の際はビニール袋内にホルマリン水でぬらしれ脱脂綿の塊を入れておいたり、又はホルマリンの 25 倍位のうすいものを少しずつ再注射すればよいのである。もし解剖を急がぬ場合や余分のものは 25 倍位のうすいホルマリン水溶液につけておけば数年間は大丈夫である。ホルマリンは羽毛の色にも変化を与えることなく、キビタキの黄色も変色しないのである。

つぎはこれを送る方法であるが、小鳥類で少数の場合は五種便でよい。それ以上の場